



中邑あつし

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零

【Nコード】

N8602Z

【作者名】

中邑あつし

【あらすじ】

今時、珍しい硬派で正義感の強い不良、柚木太成。

一方、学校では毎日、イジメに遭い、両親には毎日、借金苦に虐待を受け、友達が一人もない相原誠。

柚木太成。相原誠。この二人が出会うとき、物語は大きく動き出す。

そして、舞台は4年後、日本は連続暴力団襲撃事件が世間を賑わせていた。その組織の名はZERO。暴力団は、ZEROに対抗すべく、銃器を密輸入。そして、ZEROを追う二人の刑事、碇と相

良。

「これらが作り出す物語は、ヒューマンサスペンスホラーです。」

1・柚木

人は、どれほどの物を失くすことが出来るのだろう

どれだけ失くせば0になれるのだろう

いつから、ボクの手はボロボロと物が溢れ落ち始めたのだろうか……

二〇二三年 七月

「一体どうなってんだ！」

「皆、一斉に動き出しました！ 東京は愚か、北海道、関西、中部、九州！」

「クソッ！ 急げ！ 手が空いてるものは全員、近くの現場へ迎え！」

「無理です！ 数が多すぎます！」

「構わん！ 行ける奴だけでもいい！」

「駄目です！ 既に現場へ向かってるもので手一杯です！」

「なんとかするんだ！」

「なんとかって！ どうするんですか！ こ、こんなこと、どうして……」

「何でもいい！ 考えてもどうにもならん！ 取り敢えず、近くの現場へ向かうんだ！」

「り、了解！」

「本当に始めやがった！ ちくしょう。どうなってんだっ！ くそ

つたれえ！」

「碇さん、現場に付きました！ 救援お願いします」

「気を付ける仲川！」

「うわあっ！」

「どうした？ 仲川！」

「どうなってるんだ……どうして、持ってるんだ……」

「おい！ どういうことだ！ どうした？ 仲川！」

「何で……こ、こんな……う、うわああー……っ！」

「仲川！ 何があった？ おい！ 仲川！ 仲川ああっ！」

序章

一・柚木

二〇一九年 七月

暖かい日差しが瞼を重くする。眠くてたまらない。別に寝不足というわけでもなく、今日だって、昼過ぎにここへ来た。ただ、昼の校舎の屋上つてのは、人をどこまでも心地よく眠りに誘う。

「柚木くん。ねえ、柚木くんってば！」

またか……。

自分がこうして一番安らげる時間を、いつも誰かが邪魔をする。

そして、今日はこいつ。

「……………」

無駄だと分かりつつも、今までの心地いい空間からすぐに抜け出せず、柚木は瞼をきつく閉め、全身に日差しを浴びる。だが、無駄なものは無駄だ。ドスッ！

「……………」

声にならない声が出た。

腹部に強い衝撃が走る。昼に食った粕おにぎりが喉元まで上がってくる。

「ご、ごめん。大丈夫？」

自分が思っている以上に柚木が苦しむのを見て、女は慌てていた。その手には、先ほどの凶器と思われる手提げ鞆が両手にあった。彼女は、両肩に届くほどの黒髪を、夏の風になびかせ、柚木を心配そうに覗き込んでいる。

「チサ、やりすぎだろ」

柚木は、腹を抑えながら声を振り絞った。

「だから、謝ってるじゃん。いつまで寝てるの？ 学校終わっちゃったよ」

全く謝っている態度とは思えないチサの仕草も、ついさっきまでの慌てようを思い出すと笑いが込み上げてきた。

その上、この体制からだ、否応なしに、短いスカートの中の白いショーツが目に入ってくる。痛み分けた。

「なによ、ニヤけて、キモいんだけど」

チサは意表をつく柚木の笑みにバツが悪そうな顔をする。

「いや、てか、まだ昼すぎじゃねえか。もうちつと寝かしとけよ」

「はあ」

額に手をあて、チサが溜め息をついた。

「今日は、学校昼まででしょう。てか、柚木くん、学校に何しに来てるの？ 一回も教室にも来ないで、屋上で寝てるだけ？」

「分かってんじゃない」

柚木の返事にチサはあからさまに呆れてみせた。

「あんたねえ、だかつ」

「落ち着くんだ。ここが、一番」

チサが全て言い切る前に、柚木の言葉が遮った。

「そう」

落ち着くんだ。ここが、一番。そう言った柚木の目が余りにも悲しい目をしていて、チサは言葉を詰まらせた。

チサは、柚木のこういった部分を放っておけなくて、つい世話をやいてしまう。チサ自信、それを理解している。柚木は何か、他の高校生とはどこか違う場所にいるように感じられた。それは、柚木本人の意思に反して。

柚木に対して相槌しか打てない自分がもどかしい。でも、それは間違っている。自分の場所がどうか、自分で決め付けてしまうのは何か違うし、他人が決めることでもない。

「その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もっと、もっとたくさん、自分の場所があると思う。だから……」

言いかけて辞める。自分がどれだけ恥ずかしいことを言っているか、柚木のニヤけ顔で現実に引き戻されたからだ。

チサは、これまたあからさまに顔を赤くしてみせた。

「ああ、もう一つあったわ。俺の場所。こいつだ。ツ痛」

柚木は、言い終わると同時に口元の絆創膏を剥がしてみせた。ピリツとした痛みに、屋上の優しい風が柚木の口元を撫でる。

「なんで、そうなの男つて。喧嘩ばっか」

また、あからさまに頭を抱えるチサに柚木は笑みがこぼれる。

「お前には、分かんねえよ。けど、俺、バカだからよ、いろんなゴチャゴチャ面倒くせえの抱えて悩むより、なにも考えず突っ走って殴り合つてると、それが楽しくて仕方ねえ」

まったくくでもないことを言っている。

殴り合うだの、それが楽しいなど、チサには全く理解できなかった。

それに、今時リーゼントという時代錯誤な柚木の髪型は、それ以上に理解出来ない。

ただ、そう言っている柚木の顔は、とても無邪気で純粹だった。

「鞆、サンキュ」

チサの手から柚木は鞆を受け取ると屋上の出口へと向かう。チサは小走りに後を追いつ柚木の顔を覗き込んだ。

「アイス。食べたくない？」

これまた、あからさまにニヤけた顔で、チサが突拍子もないことを言うのだ。

「は？」

「アイス。私、バニラがいい」

「俺が金ないの知ってんだろ」

「いいよ。私が奢ったげる」

「何企んでやがる」

「人聞き悪いこと言わないで」

明らかに、チサが何か企んでいる事が見て取れたが、柚木は、ことさら奢りという言葉に弱かった。

澄んだ空から照り返す日差しと、夏の風が創り出した屋上の心地よさに別れを告げ、柚木は屋上を後にした。

コンビニの駐車場でチサは子供のようにアイスを舐めている。柚木はアイスという気分でもなつかたらしく、缶珈琲を片手に持ち煙草を吸っていた。

「ねえ。煙草っておいしい？」

チサは、柚木の口から出てくる煙を目で追っている。

「美味いって思うときもある。飯の後とか。でも、美味いとか以前に大概が吸わないとやってらんねえ」

「分かんない」

「分かん方がいい。吸わないに越したことはない」

「お金ないくせに煙草は買うんだ」

チサが棘のある言葉で柚木に言う。別に未成年だからとか、そういうのではなく、柚木の現状を考えた上でだろう。

「これは、笹崎から一カートン貰ったやつ。それに、煙草代を浮かしたところで、家の借金はどうにもなんねえよ」

「そうかもしれないけど。お父さん返せなかったら結局、柚木くんが……」

「メンドクセエの。親父の借金に振り回されんのは。いざとなったら、夜逃げでもなんでもすりゃいいだろ」

柚木がそう言うと、チサがあからさまに俯いた。

左手に持っていたアイスは、既に失くなり棒切れになっている一方、手持ち無沙汰な右手は、膝上のスカートをきつく握り締めていた。

柚木はそれを見て、バツが悪そうにフォローする。

「ああ、まあ、なんとかなるだろ。夜逃げは最終手段だから。その

……、てか、お前何かあったんじゃないの？ 話」

柚木は、屋上での出来事を思い出していた。

昔は幼馴染ということもあり、よく一緒に遊ぶこともあり、家族ぐるみの付き合いも多かった。だが、ここ最近、学校では会話はするものの、一緒に帰るなど久しぶりだった。

「うん、あのね。別に企んでるとか、そういうのじゃなくて、私のお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって。それで、その……」

「それで、前原建設で働けと」

「うん。太ちゃん、あつ、柚木くんがよければ、進学も決まってるって言うってたし」

太ちゃん。その呼びかけに柚木は懐かしさが込み上げる。

柚木太成（ゆずきたいせい）で、太ちゃん。そして、前原建設の一人娘、前原千紗（まえはらちさ）。

……いつからだろう。チサがその名で俺を呼ばなくなったのは。いいぜ」

「へ？」

チサは、この柚木の答えがよっぽど予想外だったのか、間の抜けた声を上げた。

「なんつう顔してんだお前。だから、いいぜ。俺も卒業してから、どうすつか分かんなかったしよ。頭悪いし、それに、ガキんとき、お前の親父の働いてる姿見て、カッコイイとか思ってたしな」

みるみるチサの表情が和らいでいく。

チサは本当に判りやすい。自分で気付いているのかどうか、口に出す前に考えていることが分かってしまう。

「本当に？ お父さん、きつと喜ぶ」

チサのその大げさな喜びに対し、柚木は、そのむず痒さに悪態をつく。

「鼻水出てんぞ、お前」

「え？ うそ？」

「うそ」

ドス！ チサの両腕からスイングされた鞆は、柚木の腹に、今日、二度目の衝撃を与えたのだった。

2・喧嘩

二・喧嘩

ドカッ！

背中に強烈な痛みが走る。壁に叩きつけられた背中が悲鳴を上げている。相手の飛び蹴りでの衝撃より、そっちの方が致命傷だ。

「これで終わりじゃねえだろ？ 柚木」

背中 of 痛み に耐えながら、相手を睨み返す。

柿原宗一（かきはらそういち）。清領高をシメている。百八十センチ近くある身長と、やけに老けたその顔付きは、まるで同じ高校生とは思えなかった。

柚木と柿原の喧嘩はこれで五度目。四勝一分。

喧嘩にも、いろいろな理由がある。派閥争い、誰が一番強いか、仲間がやられた、等。柚木には、この喧嘩がどんな理由かなど分からない。

いや、理由など興味がなかった。ただ、喧嘩する度に強くなっている柿原と喧嘩するのが楽しくて仕方ないのだ。

「バカヤロウ。喧嘩の最中に喋ってんじゃねえよ」

川原に柚木と柿原が腰掛け、柿原が煙草に火を付けた。

互いの制服は所々が破れ、互いの顔は見たものじゃない。柚木の自慢のリーゼントはやる気なく頂垂れ、柿原の左目は視界を遮るほど腫れ上がっていた。

川の流れは穏やかで、茜の夕日が、川に斑なオレンジ色の光を彩っている。時折、風が傷口を撫で、心地よい痛みが柚木等を包み込む。

「おい、煙草一本くれよ。柿原」

「は？ テメエの吸えよ」

「持ってねえんだ。俺が勝ったんだ。敗者は、煙草一本くらい献上しろ」

柚木の言動に、明らかに柿原が怒りを覚えている。

「テメエ、頭イカレちまつたんじゃねえのか？ 勝ったのは俺だ。先に氣い失ったのはテメエだろうが」

「先に立ち上がったのは俺だ。それに、お前がもう動けないと分かったから、俺は寝ただけだ」

「んだとお！ もう一回やっか？」

「メンドクセエ」

「またそれかよ。ちつ、ほらよ」

馬鹿らしくなったのか、柿原は柚木に煙草を差し出した。

「サンキュ」

柚木は、煙草を咥え、顎を柿原に突き出した。

「ん？」

「火」

柿原の顔に怒りが露になる。

「テメエ。ナメてんのか」

「火、持ってねえんだ」

「ちつ、分あったよ。テメエで付けろ。」

柿原はバツが悪そうにライターを差し出した。柿原はなんだかんだと言っても面倒見がよく、後輩達からも慕われている。柚木は、そういつた柿原を男として心から尊敬していた。

「よお、最近、清門高の噂知ってつか？」

柚木が煙草に火を付けたのを確認すると、突如、柿原が思い詰めた顔で問掛けてきた。

「噂？ よく分かんねえけど、清門高の奴ら、最近、幅利かせてんのか、ウチのもんが何人かやられてる」

「お前んともか。清門高に寺田つてのが転校してきたらしいんだが、そいつがヤベエらしいんだわ」

「ヤベエって、強えのか？ 珍しくヘタレてんじゃねえか」

柿原がらしくないことを言うので、柚木は悪態を付いてみせる。
だが、柿原は、意外に悪態に噛み付きもせず語り始める。

「いや、なんか、違うんだ。その、なんつっていいか、俺らガキは、頭悪いし、喧嘩しか能がねえかもしれねえ。でも、それでも、シガラミだらけの大人になる前に、ガキのうちしか出来ないこととか、拳ひとつでどこまでいけるかとか。下らねえかもしれんけど、そういったもんだろ？」

そりゃあ、頭に血い昇って刃物だしたり、下手したらイカレたヤロウが人を殺したりすることもある」

柿原が、頭悪いなりに何かを伝えようとしているのは分かるが、柚木自信、頭が悪いため、柿原が何を言いたいのかうまく伝わらなかった。

「で、結局、何が言いたいんだ。その寺田つてのが誰か殺ったのか？」

柚木は答えを急いだ。柚木にしてみれば、柿原が結論を先延ばしにする理由が解らなかった。

「いや、寺田自信は何もしていない。いや、何もしていないこともないか」

柿原の言動に柚木は、ますます訳が分からなくなる。

「どっちなんだよ」

「わりの、何つっていいか、そいつは、直接喧嘩もしなけりゃ、表にも出てこないらしんだ」

「なんだそれ。そんなん、ただのイモじゃねえか。そもそも、寺田なんてホントに居んのかよ？」

「ああ、全くだ。俺も、寺田つて奴が本当に居て、表立ってくれりゃ、どんなヤバイ野郎でも、ぶち噛ましてやるんだが。まるで、実態が掴めやしねえ。それに……」

聞けば聞くほど、柿原の言っている事が理解できない。柚木の頭は、複雑な事に追いつける程の思考を持ち合わせてはいなかった。

というか、柚木にとって寺田の存在が居る居ないは、どうでもよかった。なんだかんだと、清門高をシメてしまえば、それで済むと考えていた。

「それに？」

柿原が、何か言いかけていたのを思い出し、柚木は続きを促した。
「どうも妙なんだ。ウチの奴等は清門高にやられたつつつた。でも、奴等が着ていた制服は大滝高だったって言うんだ」

急に辺りの空気が張り詰めた。いや、辺りの空気が張り詰めたのではなく、柚木自身が動揺し、そう感じたただけだ。

「どういうことだ。ウチの高校じゃねえか」

「ああ」

訳が分らない。大滝高の制服を着ているのなら、何故、清門高にやられたなんて。

そもそも、自分の高校の者が清領高に手を出すはずがない。いや、それは間違いか。大滝高と清領高はもとも仲が悪い。だが、だからこそ、大滝が清領に手を出したら、それが自分の耳に入らないわけがないのだ。

柚木は訳が分らないながらも、柿原の言ったヤバイ、その空気を感し始めていた。

「お前の疑問は分かる。制服がテメエんとことから、テメエが絡んできてると思っていたがどうも違うらしい。それに、テメエんこの制服来た本人が自分は清門のもんだと言ったらしい」

胸糞悪い。ムカついたから殴る。テッペン取るために喧嘩する。

それは、そういった単純なものじゃない。

……なんか、ドロドロしてやがる。

「マジ、訳分かんねえ」

柿原はかまわず続ける。

「俺は、始めはテメエんところが清門に下っちまったって思った」

「んあ？ んな訳ねえだろ」

柿原が、予想外なことを言うので、柚木は苛立ちを隠せない。だ

が、冷静に考えれば柿原がそう考えるのが自然なのだ。

「まあ、一本吸えや」

柚木に対し柿原は冷静だ。場を見据えている。頭に血が上っている。煙草に火を付けた。

そして、それを見届けてから、柿原はゆっくり続きを語りだす。

「ところがだ。次は、ウチの制服着てるもんが清門の名を語ってるのを見た奴がいてな。そいつにやあ、俺も驚かされたってわけよ」

「で、どうなつてんだよ？ ああ？」

イライラする。ついさつき、冷静になったはずなのに。

柚木はどうしようもないイライラを柿原にぶつけた。自分に対し冷静な柿原が、余計に自分をガキの様に感じさせてしまうのだ。

「そう、突っかかるな」

以前、柿原は冷静だ。ますます自分が小さく見え、柚木はただ、ぶつけようのない怒りを、川面へと石を投げつけた。

「で、俺なりにいろいろ調べたんだ。そこで、少しずつだが見えてきやがった」

柚木は、口を挟むと結論が遠ざかることを覚えたのか、黙って聞いている。

「金だよ」

「金？」

金。嫌な響きだった。柚木の周りには何かとそれが付き纏う。柚木は金の持つ怖さ、汚さを、身をもって知らされていた。柚木にとつての喧嘩はそれを忘れるための手段に過ぎないのかもしれない。

「そう、金。寺田は、金で人を動かしている。清門だけに限らず、他校も巻き込んで」

虫酸が走る。内臓が振れる感覚に襲われる。

金で苦しんだ分、金の怖さを知っているからこそ、柚木は金持つの絶大な力も知っている。金で人の心を動かすことが出来るのか？ 答えはYESだ。全ての心、全ての人が金で動かされるといいうわけではないだろう。だが、現実、大概のことは金で人は動くのだ。

この街では、負け知らずの怖いもの知らず、最強を誇る柚木太成でも金の力には憤りを感じるほかなかった。

「で、その寺田の野郎は金使って人集めて、何がしたいんだ？」

「分かん」

「なっ？」

ここまで、話しておいて分からないのでは、結局、結論なんて出ない。

「俺は神さんでもねえし、寺田の評論家でもねえ。ない頭絞って、ここまでは調べたんだ。バカにこれ以上期待するな」

柿原の言うことは最もだ。柿原が寺田のことを調べていた時、柚木は周りに目もくれず、ただ、喧嘩し、はたまた校舎の屋上で昼寝をしていた。そんな柚木が、柿原に全てを求め、苛立ちをぶつけるのはお門違いなのだ。

「まあ、寺田って野郎が何か企んでんのは間違いない。テメエもそれ肝に命じて用心するこった」

柿原は、たまに親父くさいことを言う。だが、柚木は、柿原のこっぴどいことを憎めないとも思うのだ。

「じゃ、俺、帰るわ」

そう言うと、柿原は、手を後ろ手にひらひらさせ、単車に跨ると、低い排気音を川原に響かせ帰路に向かった。柚木は、ただそれを眺め、柿原の姿は次第に無くなり、単車の低い排気音だけが遠くで聞こえている。

「ちっ、俺の場所がまた無くなっちゃったじゃねえか」

柚木にとって仲間、喧嘩といった自分の空間が、また、金によって奪われた気がして、ただ、その場で立ち尽くすしかなかった。

『その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もっと、もっと、たくさん自分の場所があると思う。たくさん。だから』

……なんで今、
「笑けてくらあ」
テメエが頭ん中にいんだよ。

3・金

三・金

夕暮れ時、五月蠅いほどの蝉の声は、まだ帰路へ響きわたっている。時間の経過と共に夜が訪れ、次第に蝉の声は、涼しい夏虫の声へと変わるだろう。

昨日、雨が降ったためか、湿度を残した空気は、身体にジメジメと纏わり付いてくる。制服のカッターシャツが地肌に張り付き、気持ち悪さを際立たせる。

歩き慣れた帰路。もう、高校の登下校を繰り返すこと二年半、馬鹿でも歩き慣れる。家に近づくほど、それは増すばかり。増すばかりのはずだ。しかし、こういうことが、家に近づくほどに吐き気が込み上げてくる。

いい加減、慣れて欲しいものだ。家が安らげる場所というのは、一体どんな気分なのだろう。少なくとも自分の場所は家にはない。シガラミにまわりつく大人にはなりたくない。出来るなら、一生ガキのままでもいいくらいだ。だが、家に近づく度に、大人になったら、こんな家からさっさと逃げ去りたい。いや、この街から。なんてことを考えてしまう。

『あたしのお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって』
『本当に？ お父さん、きつと喜ぶ』

……またこいつか。俺の頭ん中に湧いてきやがる。

分かっている。自分がこの街から出て行けないことも、夢を追うには、自分の環境がそれを許してくれないということも。

小さな街に嫌気が差し、ここではないどこかでと夢は視るものの、

柚木自信、この小さな街の社会に食い潰される、ちっぽけな一人の人間に過ぎないのだ。

金かえせ！

借りたものは返しましょう。

柚木さんは人のお金を返せない非国民です。

ここの住人は人のお金で生きています。

死んでも構わないので、お金を返してください！

くたびれた一階建てのアパートの片隅に、落書きやら張り紙でありったけの罵声がアパート一帯を埋め尽くしていた。窓なんて、張り紙だらけでその役割を果たせていない。

そして、ドアの前には、スーツ姿のいかにもそんな男が二人。二人の足元には、数本の煙草の吸殻が散乱している。その時間の経過が、金に対するこの者等の執拗なほどの執着ぶりを、柚木に否応なくも痛感させるのだ。

髪をオールバックにした、紫のスーツを着た男が口に煙草を咥えると、すかさず、グレーのスーツ姿で細身の男が、それに両手で火を付けた。二人の上下関係がハッキリと伺える。

「またか」

当然、予想していたことに柚木は頭を抱えた。

「おかえりい。太成ちゃん」

今時、昭和を感じさせる紫のスーツを着た男が、猫なで声で柚木に詰め寄ってきた。

「太成ちゃん、君の親はいつだったら家に居るのかな？」

「知らねえ」

「んだと？ コラ！ テメエ、口の聞き方……」

「まあまあ」

柚木の態度が気に食わないのか、細身の男が食ってかかってきたが、猫なで声の男がそれを割って宥めた。

「しかし、佐伯兄」

細身の男は、バツが悪そうに佐伯とかいう男に場を委ねた。

「太成ちゃん。どうせ、お父さんは居留守使ってんでしょ？ お父さんが駄目なら太成ちゃんでもいいからさあ。三百万、返してくんない？」

猫なで声が妙に鼻に付く。ジリジリと、胸の奥の方から厭らしいプレッシャーが押し掛ける。

「俺が払える訳ねえだろ」

と、瞬間、佐伯は柚木の胸ぐらを両手で掴み上げ、顔を歪ませ、佐伯の声がドス黒いものになる。

「払えねえじゃねえ！ 払うんだよ！」

このギャップの使い分けが、人を恐怖に駆り立てるのに効率がいいのを佐伯は経験から身に付けていた。

柚木は構わず佐伯を睨み返す。

「威勢がいいねえ。ウチの組に欲しいくらいだ。テメエ、この辺じや、幅あ効かせてんだろ？ カツアゲやら上納金やらで金集めりや済む事だ。なんなら、ステッカーぐらいは作ってやる。それ、一口十万で売って来いや」

「分かった。分かったから、もう帰ってくれ。ステッカーは要らない。金はカツアゲでもして集める」

何も分かってはいない。金を返す気などさらさらなかった。

……もう、メンドクサイ。

取り敢えず、この状況の打開に、柚木は従ったふりするしかない」と結論付けたのだ。

「おう。太成ちゃんが物分かりのいい子で助かるよ。また来るからな」

そう言つと、佐伯は、細身の男を連れ去つていった。

「クソッ！」

ぶつけようのない悪態を付き、柚木は玄関のドアを開けた。

真っ暗だ。部屋の電気を付けても誰も居ない。父は本当に居なかった。

……クソ親父。どこに行つてやがる。仕事か？

最近、父は夜も仕事をしているらしく、ほとんど家に居る事がなかったが、柚木にとってそれは気が楽でもあった。

大体が、柚木が家族との馴れ合いなど出来る柄ではなかった。それ以前に、この状況じゃ馴れ合いどころではないのだ。

母が生きていた頃は、羽振りもよく、父の人一倍筋肉質でガツチリとした体型は、誇らしくもあり、憧れさえ抱いていた。

昔から父は無口で余り喋らなかつたが、今は、それが何を考えているのが解らず、無性に腹が立つ。

テーブルには、カップ麺がひとつと、置き手紙。

―いつも、こんな飯ですまない―

「クソッ！」

柚木はただ、憤りを口の中に麺と同時に放り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602z/>

零

2011年12月29日00時55分発行